

■パネル発表

「パネル発表趣旨文」

講演本からひろがる大衆文化研究の視座——
大正から戦後まで——

(パネラー) 奥野久美子・中村健・平尾淑太・

松田忍

近年、近代文学と講演・落語・浪曲などの大衆演芸との関係が注目されている。落語の漱石への影響をはじめ、研究も蓄積されており、二〇二三年には特集が組まれた学会もある。しかし閲覧できる演芸関連資料は決して多くはなく、研究資料には乏しい。

大阪公立大学では二〇二一年に、講演本を中心とする数万点の演芸資料(吉沢コレクション)を受贈した。

本発表では、講演本や関連資料を用いて、大衆文学に直結する(書かれた)講演(書き講演)が広まった大正から、昭和戦後にかけての出版史、演劇、小説を取り上げる。

まず中村の報告は、大衆文化における新ジャンルを受容と洗練化を具体的に考察する。大衆文学は、書き講演を基盤に新講演→大衆文芸→大衆文学と変化・発展してきた。中でも書き講演と新講演の分化は重要な事例である。まず、書き講演・新講演の特性を(編集)という視点から考える。さらに、新ジャンルの受容と洗練化のパターン事例として、博文館の『講演雑誌』の編集をとりあげる。書き講演から大衆文学の流れの中で講演掲

載雑誌に関する出来事としては、一九一三年

に講談社『講談倶楽部』で起きた講師師事件

と新講演の掲載、一九二二年の博文館『講談雑誌』に白井喬二・国枝史郎の登場という二

つの事例が語られてきた。本発表では、この

二つの事例の間にある博文館の『講談雑誌』

の創刊から白井喬二・国枝史郎起用までの編集の変遷と書き講演と新講演の相克を対象

に検討したい。

続く奥野は、講演(編集)の実状について、

編集者・小林次郎に焦点をあててその一端を明らかにする。小林は大正期の講演本叢書

〈博文館長篇講演〉の編者の一人だが、他の

編者と違い、速記者出身ではない。同叢書は〈書かれた〉というより〈編集された〉講演本である。吉沢コレクションの資料等から、

小林が架空の講師師名を含む複数の筆名を使い、同じ演目を〈編集〉し直していた様子が

わかる。編集の実状を具体的に示すことで、混沌とした講演出版史の一端を明らかにし

たい。

次に平尾報告は、大正から昭和戦中期に商業演劇作家として活躍した真山青果の作品

における、〈書かれた〉話芸との強い結びつきを明らかにする。彼の戯曲「初袷秋間祭」

(一九三四年)は、侠客の安中草三が上州安中藩の庄政を正す物語であり、その原典は、

三遊亭円朝作の人情噺「後開榛名梅香」であった。本報告前半では、落語速記本や講演本

を通して確立された安中草三の物語を「否定的媒介」(花田清輝)して反「封建」色を強

めた、青果の作品の独自性を検討する。また

後半では、「初袷秋間祭」が敗戦後も再演された事実に注目し、青果と役者たちとの協働

が、戦争を跨ぎつつ大衆的な物語のアクチュ

アリティを繰り返し更新した過程を浮かび上がらせる。

最後に松田報告は、「故郷もの」(相馬正一)と称される太宰治「帰去来」(一九四三年)

と津軽疎開中に執筆した作品(一九四六年)に焦点をあて、戦中・戦後の講演本を受容を

明らかにする。GHQの初期占領政策では封建的忠誠心や仇討に基づく義士伝、任侠物等

は、民主化を阻害するものとして文化統制が行われた。その状況下で太宰は『義士銘々伝』

の岡野金右衛門や「幡随院長兵衛」を参考に「未帰還の友に」(一九四六年)、「親友交歓」

(一九四六年)を発表している。なぜ太宰は講演の英雄を題材にしたのか。戦中・戦後の

検閲と講演本を軸に(戦後文学のもつ批評性)を問い直してみたい。

これらの報告を通じて、講演本を中心とする資料に裏打ちされた、大衆文化研究の新たな視座を提示する。豊かな大衆文化の基盤を

持つ大阪に、講演資料として随一の質と量を誇るコレクションが加わり、大衆文化研究の

可能性が広がることを、関西支部大会の場で示したい。

■自由発表

「自由発表趣旨文」

川端康成「花のワルツ」論——「少女」たちを分つ「結婚」への葛藤—— 吉野 莉奈

川端康成文学には、「少女」時代を脱する

ことと「結婚」への葛藤とを結びつけて描く作品が散見される。本発表では「花のワルツ」

『改造』昭一一・四一五、『文學界』昭一一・七、『文藝』昭一一・一一)を論じ、その一端を

提示したい。本作は川端の舞踏観が表れた作品、或いは「少女成長の物語」として論じられ、主に焦点が当てられたのは踊子の一人である星枝であった。「処女性」を有する星枝

に川端の芸術観が表れており、もう一人の鈴子は彼女の「母性」ゆえに「日常」「平凡」を象徴しているとして捨て置かれてきた。しかし二人の舞踏は各々の美しさを持つことが

本文中に示されている。人物形象(他者との接し方・生育環境・感情表現)の対照性も見

過ごせない。本作は「少女」時代を象徴する「花のワルツ」を踊り終える場面で始まり、

「二つの体で一つの舞踏的な体」を描いている。二人が道を分つ行程を描いている。したがって本作を論じるためには双方への着目が必要であり、それによって本作の主題の一つ

が「結婚」をめぐる思春期の(娘)の葛藤にあることが明らかとなる。

本発表では鈴子と星枝との差異と共通点

とを明確にした上で、「少女」でも「母」で

もない〈娘〉としての二人の在り方を論じた。次に二人にかかわる男性達との関係を考察し、彼女等の変化のきっかけが、それぞれの「結婚」や「愛」をめぐる葛藤にあることを示す。他者依存的であった自身を乗り越える鈴子と、自己喪失への恐怖ゆえに芸術や性の目覚めへの抵抗を続けようとする星枝という、思春期の〈娘〉の対照的な在り方が描かれているのが本作といえる。

石原純の短歌における〈詩論〉——定型歌壇への反駁としての「新短歌概論」とその後

野間 颯

著名な物理学者であり歌人でもあった石原純は、紅野謙介と島村輝、西尾成子(二〇〇九)によって多角的に検討された。その後は加藤夢三(二〇一九)によって物理学者としての側面がより検討されたものの、歌人としての研究は余白が多く残されている状況である。しかし石原純が提唱した、非定型かつ口語を使用する「新短歌」を再考することは、戦中期歌壇の動向を再評価することに繋がると考えられる。

石原純の「新短歌」は、ポール・ヴァレリーの純粹詩やフツサールの現象学からの影響も色濃くあり、定型歌壇から難解だと批判され、「わかる・わからぬ」論争を引き起こしていた。結果的には大日本歌人協会から新

短歌歌人が締め出されることに繋がった。またその難解な印象は、新短歌歌人の増加の妨げとなっていた。そのような状況下で「新短歌概論」は一九三六年から一九三八年にかけて雑誌『立像』と『新短歌』上に連載された。これには定型歌壇への反駁と、新短歌理論の明確化が目されていたと考えられる。

本発表では石原純が「新短歌概論」で主張している内容と、石原純が日中戦争下に雑誌『短歌研究』で選歌した、読者からの投稿短歌における表現との対応関係を検討する。これにより、戦時下においては「新短歌」の理論確立を目指す姿勢がかえって、時局にふさわしくないものとして定型歌壇を中心に受容されたこと、また石原純自身もそのことを自覚しながら自らの主張を変化させていたことを明らかにする。

■特集 戦後文学をひらく

「企画趣旨」

二〇二四年の春季大会では「戦後文学をひらく」と題する特集を組み、現代において戦後文学を繙く意味を考えたい。近年、戦後文学を批判的に見直す試みが起こっている。たとえば、「戦後文学のもつ批評性」の価値を認めつつも、戦後の文学史では「植民地出身の作家や女性作家、あるいは階級や貧困の問題、原爆という出来事性など、周縁化された事象は、「戦後文学」の中心からゆるやかに

差異化され」といると批判(紅野謙介・内藤千珠子・成田龍一編「戦後文学」の現在形)され、「戦後」というバイアスを通して編成される記憶は、アメリカとの戦争、しかも日本の「終戦」物語に符号するものに限られる(高榮蘭「戦後」というイデオロギー)とも批判される。しかし一方で、戦前・戦中を反復するかのような今日の様相を批判し、私たちのこれからを見据えるために、戦後文学の膨大な作品群が胚胎する可能性を現代にひらくことには意味があるはずだ。いまなお「戦後文学は生きている」(海老坂武)のである。

今日の研究者が戦後文学を語るとき、どのように歴史的記憶の再編が行われ、何が受容され、何が排除されるのか。研究主体のアイデンティティが問われることにもなる。また、戦後文学を総括する際に、関西という視点が導入されることはあまりない。野間宏、椎名麟三、大岡昇平、庄野潤三、遠藤周作など、関西での生育や修学、就労が文学的個性の生成に影響した戦後文学の重要な書き手たちがいる。関西から見た戦後文学は、どのような景色を映し出すだろうか。

一口に戦後文学と言ってもその射程は広い。そこで本特集では、第一次・第二次戦後派、第三の新人に代表される、一九五〇年代までに文壇に登場した世代の小説家・詩人・評論家・劇作家の文学に絞って考えたい。

「発表要旨」

堀田善衛『時間』における南京事件と国際社会の中の日中関係

山戸 麻紗子

堀田善衛『時間』(一九五三・十一―一九五五・一)は、中国の知識人を視点人物に据え、その思索を日記体形式のもとに描出した作品である。本作は中華人民共和国成立に至るまでの近代中国思想史に南京事件を位置付け、民衆と結びつく主人公の政治的判断力を描き出した。これは、竹内好が中国民族運動の「高いモラル」と呼んだ中国の思想性と通底する。戦中における日本知識人の無思想性と対決した本作は、後に竹内好が行なった「近代の超克」の再検討を準備する意味を持つ。

先行研究では、陳董君や丁世理などが、堀田が参照した東京裁判の記録などと照合し、本作執筆に際しての史料調査について検証した。野村幸一郎は、「歴史」を認識する立場に自己を置き、同時に目前の現実を変えようと企図する主人公の姿が、堀田の反美学的な姿勢を反映していることを明らかにした。しかし、本作の主人公が上海クーデター(一九二七年)の際の転向者にしてスパイであること、南京事件への問題意識や「末期の眼」批判が知識人論や近代性論に接続することに關しては、考察の余地が残されている。本発表においては、中国と南京事件に關す

る国内外の言説が『時間』に与えた影響について、史料調査に立脚した考証を行なう。具体的には、堀田が参照したと思われる『ニューヨーク・タイムズ』等の新聞、スノーやティンバリーらジャーナリストの言説と本作との関わりに着目する。本作には英米のジャーナリズムがとらえた日中関係が反映されているのである。

外地文学を引揚げる —— 池田克己と日本未来派の戦後 —— 木田 隆文

近年の外地文学研究は、現地の文芸文化環境の解明に多くの成果をもたらしている。その一方で、検討対象を外地が消滅する一九四五年八月までに限定する傾向があり、戦時外地——戦後日本を連続的に検討する視点は希薄であった。

本発表は外地（特に戦時中国）で育まれた文芸文化が、戦後日本の詩壇に与えた影響を測定するものである。

その事例として取り上げるのは、一九四七年に池田克己が創刊した詩誌『花』・『日本未来派』である。池田は戦前の吉野で『豚』を創刊、関西を中心に全国の若手詩人を結集した。また戦時上海では、武田泰淳ら現地居留民作家を結集した『上海文学』を刊行、同時に南京にいた草野心平とともに刊行した詩誌『亜細亜』を拠点に大陸各地の日本文学研究者や、和平文壇側の中国文学者との交流を

深めるなど、大陸日本語文壇において大きな役割を果たした。『花』・『日本未来派』には、

その池田が戦前内地——戦中／内地——外地で糾合した文学者が再結集しており、特に戦時下の大陸の文芸環境が色濃く反映している。

本発表ではまず、戦時中国から戦後日本における池田の活動と、そこで形成された人的・文化的ネットワークを素描する。そのうえで『花』・『日本未来派』にみられる中国表象に注目し、外地文学者たちがその経験を戦後にいかに引き継ぎ、あるいは忘却したのかを考えてみたい。なお余裕があれば、戦前期吉野の文化環境と戦後詩壇の連続性についても言及できればと思う。

梅崎春生と遠藤周作 —— 「第一次戦後派」と「第三の新人」の交渉 —— 長瀆 拓磨

梅崎春生と遠藤周作は、八歳の年齢差を超えて公私にわたり深い交流があった。そこには私的な意味で「ウマが合った」ばかりでなく文学者として共鳴する何かがあったことは確かであろう。そこで本発表では、両作家の共通点や所属する文学グループとの関係を探ると同時に、遠藤周作が作家として出発した昭和三十年代前後の文学活動に梅崎春生が与えた影響を検討していきたい。

便宜上前半と後半に分けて考える。遠藤周作は昭和三十年代前半、関西での戦争体験とフランスでの戦争の「痕跡」をもとに主とし

て戦争を背景とする作品（『白い人』『黄色い人』）を描いた。梅崎春生の戦争小説『桜島』

『日の果て』などに親近性を持った作品と言えよう。それが後半になると九州を舞台とした作品が増える。福岡（『海と毒薬』）、鹿児島（『火山』『ヘチマくん』）、長崎（『最後の殉教者』『沈黙』）である。福岡は梅崎の出身地であり、取材旅行の際には新聞社に勤める友人を紹介してもらっている。鹿児島も梅崎が海軍体験をした土地であり、ここでも知り合いに便宜をはかってもらっている。さらに、遠藤は『おバカさん』以降ユーモア小説を書き始めるが、梅崎の『ポロ家の春秋』の影響も考えられる。ちなみに梅崎春生は『ポロ家の春秋』によって「第三の新人」の「兄貴分」として認められ、遠藤周作も『おバカさん』によって「第三の新人」として認められた。

両作家の共通点は多い。

■学会印象記 二〇二三年度秋季大会 自由発表（午前） 天野 勝重

二〇二三年度日本近代文学会関西支部秋季大会は近畿大学で行われた。午前中の二本について印象を記したい。

一本目は吉井美稀氏の「小杉天外『魔風恋風』論——『女学生』をめぐる言説の変遷と立身出世——」で、会場との質疑応答では女性教育に関して作者自身の発言等の資料が

あるのか、また初野の死因が脚気衝心であることは一人の近代青年の死として昇華させたい作者の思惑があったという発表者の着眼に対して白井吉見の『安曇野』なども参考になるのではないかと、この意見が出た。

二本目は佐々木梓氏の「批評の萌芽——小林秀雄『からくり』論——」で、小林秀雄のラディゲ論は同時代的に見て特殊なのか、「からくり」中で『肉体の悪魔』についての言及は何故あるのか、また「からくり」は「様々な意匠」の語り直しなのではないか、など多くの質問が寄せられた。

両者ともに数多くの資料を提示し、非常に堅実な発表であったと感じた。

自由発表（午後前半） 天野 知幸

午後は三島由紀夫に関する二つの発表があった。一つ目は霍思静氏「三島由紀夫『火宅論』——占領期の言語空間を背景に——」。

三島由紀夫のデビュー戯曲「火宅」を扱い、戦後知識人男性と女性の表象と、岸田國士「紙風船」からの影響を考察した発表であった。敗戦直後の紙不足が会話に取り込まれていることにGHQ占領下の戦後日本社会の反映を指摘するとともに、幕切れの火事はGHQによる日本占領あるいは戦後社会に浸透したアメリカニズムを象徴的に描いたものだと解釈した。この結論のほか、アメリカニズムに対する批評性の有無や、法華経が比

喩的に用いられている点などについて、フロアーから質問や意見が出た。GHQ/SCP A P 検閲下という言論環境の特性を考えると、比喩という非直接的表現が持つ批評性はたしかにある。それゆえ、霍氏の研究も、当時のプレスコードなどを参照することで、アメリカニズム表象や比喩的表現の意味付けがより明確になると思われた。

二つ目はウォルター・ペイターの影響研究を進展させた福田涼氏の「三島由紀夫「貴顕」論——ペイター受容と「肖像画」をめぐる——」。福田氏は、まず「貴顕」の語りを丁寧に分析することで、筆致・主人公の容貌に関する表現が彼の「気質」と相即する語りであることを明らかにし、次に、「肖像画」の批評的側面がペイターからの影響下にあることを考察することで、「貴顕」が芸術小説の系譜にあることを結論づけてゆくという発表だった。フロアーからは、三島の彫刻愛や肖像画というジャンルの特性、批評性についての質問が出た。三島が内面の表出として外形を重視し、その理想像を彫刻に置いていることは知られている。語りに着目した福田氏の発表は、三島の芸術論と文学論との関係や文学的手法の一端を小説の形式面から明らかにする興味深いものであった。今後、さらに説明されることで、影響論の先にある批評の問題も明らかになるものと、研究の進展が期待された。

自由発表（午後後半） 糸賀 寛

長澤拓哉氏「安部公房『砂の女』論——変革する砂」は、公房の文学思想が『砂の女』にどう投影されたかを論じたものである。五〇年代の公房は、大衆の認識を変化させ、変革を促すものとして文学を見ており、大衆を革命達成の要石と考えていた。そのような彼の創作方法にドキュメンタリーがあるが、それは現実の構造を捉え、読者の認識を更新するものであった。認識の変化が人の行動を社会革命に繋がるものへ変化させると公房は考えており、こうした現実の捉え方を重視する姿勢は本作にも見られる。『砂の女』の砂は依然認識されない流動的な外部＝現実を意味し、そこから水を取り出すことは新しい認識を手に入れることの暗喩と推察される。これを踏まえると、本作は読者に現実認識刷新のための視点を獲得することを喚起する作品と言える。本発表の白眉は、従来切り離されることの多かった、『砂の女』と公房の革命に対する考えを結びつけた点にある。

太田帆南氏「筒井康隆と演劇的小説——「家族場面」分析から見えるもの——」は、「家族場面」において登場人物が自覚的に役割を演じるこの意味を、康隆の演劇観と関連づけて論じたものである。本作は夢のような世界で特定の人物設定を与えられた主人公が、それを演じようと四苦八苦する様が描

かれており、設定や状況に対する彼の考察、わざとらしい言動および急な場面転換によって演じることが前置化されている。本作の描写や筋の運びには、演劇人・康隆の経験が反映されていると考えられ、主人公には演じる役者の内面性が、本作の舞台設定には演劇的仕掛けが投影されていると言えるだろう。康隆文学における演技は、「夢の木坂分岐点」にも見られるように、現実を生きることと結びついており、舞台上のフィクションではないのである。本発表は、康隆にとつての虚構の意味を演劇という面から解き明かすものであり、そこに新規性がある。

■書評

栗山雄佑 著

『「怒り」の文学化——近現代日本文学から「沖繩」を考える』

田口 律男

三部構成、全一〇章からなる本書の全体像については、すでに尾西康充氏（『昭和文学研究』八七集）、柳井貴士氏（『日本近代文学』一〇九集）による周到な整理と論評があるの
で、ここでは私なりにポイントを絞り、応答責任を果たしたいと思う。本書の核心は、一九九五年九月四日に起きた米軍兵士による少女への性暴力に対する「怒り」が、いかに沖繩の文学に想起され、表象されたかを問うことにある。栗山氏がとくに注目するのは目

取真俊の諸テキストだが、そこで否定媒介となるのが「対抗暴力」である。それは、「少女を暴行した三名の米兵たちの醜さに釣り合うような」（『虹の鳥』）どす黒い暴力として発動し、充滿する。それは八万五千人を集めた県民総決起大会にも形を変えて底流する。その「対抗暴力」に異を唱えたのが、新城郁夫氏や村上陽子氏が先鞭をつけたジェンダー研究やクィア・リーディングの実践である。栗山氏は、その後を継いでいる。

「対抗暴力」を「最低の方法」と自認しつつ、それを先鋭化させる目取真俊に寄り添いながらも、栗山氏は、それとは異なる周波数（ヘルツ）をテキスト内部に読み取ろうとする。それは端的にいえば、「連環する暴力を非暴力的な手法で停止すること」（四一八頁）——のだが、それは何度も言い直しを余儀なくされる。なぜなら、それは表象困難なものであり、「文学的想像力」によってのみ触知できるものだからである。「連環する暴力」は脆弱なマイノリティを呑み込み、その声や身体を略取する。したがって、「非暴力」といつても楽観的な平和主義が想定されるはずがない。圧倒的な暴力の渦の中で、微かに発せられるノイズや身振り、あるいは空白そのものに、辛うじて「希望」の欠片が見出されるのである。それは論証としては蹟くかもしれないが、栗山氏の軸がぶれることはない。

博論を単行本化する際に書き下ろされた

第四章は、本土側のメディアや文化人の絶望的な認知の歪みを切開くことで、本書のテーマをより立体化させている。同じく、第七章では芥川賞というマジョリテイの評価を受けた「水滴」が、本書の問題構成のなかで、挑発的に読み替えられる。異なる文脈に置かれた自分の若書きの論文に再会し、私は蒙を啓かれた。沖縄の文学と私を再配線してくれた本書に感謝したい。

(二〇二三年三月二〇日 春風社 四四四頁 四二〇〇円＋税)



■二〇二四年度 関西支部

秋季大会研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇二四年度秋季大会における自由研究発表、およびパネル発表を募集いたします。支部会員の皆さまの積極的な応募をお待ち申し上げます。

◆日時・会場 二〇二四年十一月一日(日)

甲南女子大学

※詳細は決定次第、関西支部公式ブログでお知らせいたします。

◆募集人数 自由発表 若干名

パネル発表 若干グループ

◆応募締切 七月七日(日) 必着

◆応募要領 自由発表は、発表題目および六〇〇字程度の(応募段階における)結論まで明記した要旨をメール又は封書でお送りく

ださい。パネル発表は、発表題目と全登壇者の氏名と役割分担、および一〇〇〇字から一五〇〇字程度の趣旨文をメール又は封書でお送りください。科研費プロジェクトの成果報告等も受け付けております。発表者数は企画者に一任いたしますが、関西支部会員を一名以上入れてください。

発表時間について、自由発表は三〇分程度、パネル発表は二時間程度です。応募の際は、必ず連絡先(電話番号・メールアドレス等)も明記してください。発表に関して、ご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】

〒654-8585

神戸市須磨区東須磨青山2-1

神戸女子大学 永瀧朋枝研究室内

日本近代文学会関西支部事務局
もしくは、関西支部公式ブログに記載のメールアドレスまで。

■会議の記録

三月二十九日(水)

【第一回運営委員会】会員の異動について、会報三七号について、二〇二二年度会計監査について、二〇二三年春春季大会について、二〇二三年秋季大会について、二〇二二・二〇二三年度委員の自己紹介と二〇二三年度役割分担について

〔オンライン開催〕

四月三〇日(日)

【第二回運営委員会】会員の異動について、機関誌投稿締め切り直前の入会の対応について、本部非会員への会費案内の発送、二〇二三年度春春季大会の運営について、会報三八号について、二〇二三年度総会について、二〇二二年度会計報告・二〇二三年度予算案、その他会計関連、ソーシャルアワーについて、二〇二三年度秋季大会に向けて

〔オンライン開催〕

五月九日(火)

【第三回運営委員会】入退会の手続きの周知について、会報三八号の書評の追加について

七月十五日(土)

【第四回運営委員会】会員の異動について、退会希望者の会費未納期間の認定と、会費制移行期間の設置について、二〇二三年度秋季大会発表者の選出について、二〇二三年度秋季大会の運営について、会場校準備金、印刷費について、二〇二四年度春春季大会形態/日程について、二〇二四年度春春季大会企画案について、会報三八号について、会報三八号発送作業について、次回運営委員会について、会費の二重振込の返金について、名簿のクラウド管理について、会報三九号関連

〔オンライン開催〕

七月三十一日(月)

【第五回運営委員会】二〇二四年度春春季大会特集の趣旨文の修正案について

〔メールによる持ち回り審議〕

九月三〇日(土)

【第六回運営委員会】会員の異動について、登録情報の変更について、秋季大会の役割分担について、懇親会関連、会報三九号について(大会印象記)、二〇二四年度春春季大会企画特集について、名簿係と会計係の連携について、運営委員の任期短縮について、大会ポスターの送付先について

〔関西大学梅田キャンパスおよびオンライン開催〕

十一月一日(日)

【第七回運営委員会】会員の異動について、特別基金の支出について、次年度運営体制について、会報三九号について、四五周年(二〇二四年)事業について、二〇二四年度秋季大会の会場校について

〔オンライン開催〕

二月二日(月)

【第八回運営委員会】二〇二四年度春春季大会発表者の選出について、二〇二四年度春春季大会企画について、二〇二四年度春春季大会の実施方法と運営について、二〇二四年度の運営体制(運営委員長/副委員長)について、能登半島地震に関わる会費減免措置について、支部会計関連、二〇二四年度秋季大会について、会報三九号について(特に、発送作業)、

会報四〇号について(特に、書評執筆者の推薦) [オンライン開催]

三月二十六日(火)

【第九回運営委員会】二〇二四年度の係の人数配置について、二〇二三年度申し合わせと引き継ぎ

〔関西大学梅田キャンパスおよびオンライン開催〕

■機関誌『関西近代文学』投稿論文募集のお知らせ

電子版機関誌『関西近代文学』の投稿論文を募集いたします。

○第四号(二〇二四年九月発行)の締め切り

……二〇二四年五月五日

○第五号(二〇二五年三月発行)の締め切り

……二〇二四年一月五日

送り先、書式(文字数)等については、公式ブログを御覧ください。

第三号は、二〇二四年三月二〇日に公式ブログにて公開されました。

○第三号・目次

差異が拓く〈聖域〉——吉屋信子『花物語』
「燃ゆる花」と「心の花」をめぐる——

神戸 啓多

《再生》する詩的言語——小林秀雄と中原中也における〈哀悼〉の交錯——

山本 勇人

堀田善衛『広場の孤独』論——一九五〇年の国際政治と「颱風の眼」——

山戸 麻紗子

特集〈中島敦〉の現在とこれから

企画要旨

中島敦『古譚』における言語と死——「言葉の魂」を視座に——

ボヴァ・エリオ

〈限定性〉を照らす視座——中島敦『山月記』における創作——

渡邊 ルリ

中島敦文庫から見る中島敦における漢詩人——杜甫と高啓を中心に

高芝 麻子

論文要旨

電子版『関西近代文学』投稿規定／査読方法及び審査基準

編集後記



■事務局だより

◆献本のお願ひ

本会報では、支部会員の皆様が発行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先：関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否、時期、および書評者の人選については、関西支部運営委

員会にご一任ください。

◆会費納入について

昨年度より関西支部では維持会費制を廃止し、会費制を導入しています。会費三千元

(ただし前年度未納の方は六千元)を、同封の振替払込書を使用するなどの方法で納入ください。能登半島地震被災に関わる減免措置を含め、詳しくは、同封の別紙「年会費納入のお願ひ」をご覧ください。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

◆登録情報変更について

関西支部の「登録情報変更届」を作りましたので、変更の際には事務局までお知らせください。用紙は関西支部公式ブログからダウンロードできます。

◆会報の内容変更について

次号の会報(第四〇号)から、「巻頭言」と自由発表・パネル発表の「印象記」を紙面から削ることとなりました。

◆二〇二四年度運営委員

*は新規の委員

支部長 関肇

運営委員長 永瀧朋枝

運営副委員長 東口昌央、山根直子

〔書記〕金岡直子、塚本章子、原卓史、宮川康、吉川仁子

〔名簿〕武田悠希、八原瑠里

〔会計〕*天野勝重、熊谷昭宏、信時哲郎、花崎育代

〔会報〕*武久真士、松田樹、禧美智章

〔広報〕高橋啓太

〔企画〕浅井航洋、*稲垣裕子、佐々木幸喜、矢本浩司

◆二〇二四年度『関西近代文学』編集委員

編集委員長 田口道昭

編集主担 渡邊ルリ

編集委員 宮園美佳、瀧本和成、*山本欣司、*黒田大河、*白方佳果、*天野勝重、*鈴木暁世 *は新規の委員

日本近代文学会関西支部事務局

〒654-8585

神戸市須磨区東須磨青山2-1

神戸女子大学 永瀧朋枝研究室内

◆昭和初期の文化状況と〈春夫文学〉

「能火野人」・佐藤春夫

「能火野人」とは「くまのびと」の謂いなり

辻本雄一「能火野人」とは、佐藤春夫晩年の号であり、土地の歴史や文化に根差した「熊野人」を強く意識した号である。熊野の地で培った〈反骨精神〉の、その原点を辿り、〈個〉として自立し〈文学世界〉を確立してゆく過程を「通史」編や「論考」編で詳細に追う。多数の口絵写真やコラムも充実。 近刊・価未定

◆従前の作品解釈に対し、新たな知見を付与する

横光利一 複層の近代

中川智寛 新感覚派の驍将・横光利一の小説分析を主体としつつ、特に「純粋小説論」と同時期に発表された未検討長篇を多く考究対象とし、問題作「旅愁」へと接続されて行く過程を検証した。横光利一の通時的 作品研究を行い、全体像に肉迫する。 新刊・定価7370円

◆空海の足跡・教え／句碑を訪ねて

俳句の径 高野山

半田美永 空海は優れた詩文を遺した。著者はその生涯と言葉を、俳句によって読み解こうとした。明治以降の〈脱亜入欧〉の思想を、容易に受容することを拒否する〈高野山〉。〈文学〉の視点から、〈近代〉を問い直す。自詠二六三句収録。 新刊・定価1980円

◆南吉生誕百年記念出版

新美南吉の詩と童話

哀のある愛の世界

谷悦子 南吉の幼年童話と詩が、豊かな空想力・ユーモア・哲学性をもち、子どもの複雑な心と人はどう生きるべきかを描いた童話に新しさがあることを論じた。また、安城高等女学校での教師としての南吉を明らかにした。 定価3300円

◆秦恒平の全体像にせまる初の本格的論考

秦恒平 愛と怨念の幻想

永栄啓伸 秦文学の基軸は、身内観、死生観、そして人間差別への追求である。貫い子の境遇を乗り越える身内論、「生まれた」母に知らぬ間に「死なれた」喪失感が原点である。本書はこの孤立からの葛藤の軌跡を丹念に考察する。 定価6050円

◆十蘭作品の多角的・総合的解明を目指す

久生十蘭作品研究 〈霧〉と〈二重性〉

開信介 「小説の魔術師」久生十蘭。その作品群は多様な文体、巧緻な構成といった小説技巧の面で高く評価されてきた。本書は、新資料を含む十蘭の創作全二六八作品を網羅的に調査・分析し、十蘭作品に頻出するモチーフを切り口として、その作品世界を明らかにするものである。 定価3520円

◆井伏文学の揺籃期・形成期をうかがう貴重な資料

井伏鱒二未公開書簡集

ある級友への手紙

青木(秋枝)美保・前田貞昭編著 井伏鱒二未公開書簡等一七一点を収録。大正六年に始まる大正期の書簡八十一通、昭和戦前期の書簡二十五通を含み、その年代の幅広さから伝記上空白の時期を補う内容を持つ。書簡の翻字に注を加え、解説、論考を付す。 定価6600円

◆鏡花研究の未来への展望をひらく画期的な論集

論集 泉鏡花 第七集

泉鏡花研究会編 十一篇の書き下ろしの論考と、最も詳細な「参考文献目録」とを合せもって、泉鏡花研究の最新線を示すべく編集。 定価7700円

◆瀧口の芸術観・作品について未探究の側面に光を当てる

瀧口修造研究 〈影像人間〉の系譜

秋元裕子 日本におけるシュールレアリスムの第一人者、詩人・美術批評家の瀧口修造による外国文学・芸術の受容、再創造、超越を論じた本書の特徴は、瀧口が創造原理として重視した想像力の系譜を浮かび上がらせることにある。世界的な視野において瀧口修造を捉えなおす。 定価6600円

◆漱石から森見登美彦まで、短篇の構築性を解き明かす論集

問いかける短篇 翻案・童話・寓話

木村小夜 視点人物の錯誤や死角・物語が孕む矛盾・構成上の断絶・変則的な因果の構図や定型からの逸脱・反復の中の変化に着目、原拠や周辺の諸言説との比較検討を通し、漱石・鷗外・芥川から三島などの戦後作家、さらに直近の現代作家の短篇に即して、その緻密な構築性を解明する。 定価5500円

◆作家の創作方法に迫った作品論を展開

井上靖の文学 一途で烈しい生の探求

高木伸幸 昭和の文豪・井上靖のほぼすべての代表作を取り上げ、その文学全容の解明を目指す。従来の井上靖論には見られない幅広く実証的な作品論とともに、貴重な資料篇(未発表の探偵小説・舞踊劇脚本)を備え、研究史上に新生面を拓く画期的な一冊。 定価7480円

◆文学は文壇作家の小説の中だけにあったのではない

無名作家から見る日本近代文学

島崎藤村と『処女地』の女性達

永瀨朋枝 日本近代文学を無名作家群からも見渡せば、メディアにより文学がつけられていった大きな流れが見える。有名作家と無名作家、男性作家と女性作家、作家と読者との双方を見、雑誌を他の新聞雑誌との連関の中で捉える。 定価5940円

好評既刊

- 第一集 6600円
- 第二集 6600円
- 第三集 5500円
- 第四集 6600円
- 第五集 8800円
- 第六集 7700円